

まえがき

ここ数年、本を巡る議論が行われてきた。この本は、書籍を巡る議論の渦中に、『図書館の学校』に26回に渡って連載した文章をまとめたものである。

岩波書店などの人文書の専門取り次ぎ店である鈴木書店が倒産し、老舗の出版社である小沢書店や社会思想社が倒産し、発行される書籍の種類は7万2千点と増加しているのに書籍の売り上げは、6年連続で減少し、一冊あたりの実売部数も減っている。読書調査は、大学生や高校生が本を読まなくなっていることを示しており、学校の教師は本を読まない。新古書店が増える一方で、公共図書館は予算を大幅に減らされている。書籍の業界は曲がり角にきているということは確かである。『だが「本」を殺すのか』（佐野真一 プレジデント社）が、ちょっとしたベストセラーにもなった。（私もこの本の登場人物の一人である）多くの人にとって、本の世界が変わりつつあることは、そんなに重大なことではないかもしれないが、社会の節目であるということとは間違いない。

『図書館の学校』の連載で、常に考えていたのは、大げさと受け止められるかもしれないが、本は、消えてしまうのかということだった。出版社を経営し、編集を営むものにとって、厳しい結論になるが、われわれ市民にとっては、本や出版というものが必要のないものであれば、消え去ってしまったもおかしくない。この機会に、存在の理由をもう一度、問い直してみたいと思った。

さらに、私は出版社を経営していると同時に、一人の子供の父親でもある。自分の子供を育てるのと同じに社員たちといっしょに仕事をしている。いっしょに仕事をして、社長も社員も育つと言っている。連載の中で考えていたもう一つのテーマは、人が育つ、育てると言うことについてであった。(スターウオーズのジェダイの騎士の行く末に注目せよ！)

さらに私は、開店休業中ではあるが、一九九八年から「投げ銭システム推進準備委員会」というものを主催している。インターネット上のコンテンツに対して、優れているのであれば、情報を受けた方が、自分の自由意志でカンパを送ろう、送れるような仕組みを作ろうというものである。こんな運動をしていて感じたことは、作り手に対するシンパシーは成り立つのだろうかということであった。そのためには作るということへの批評も含めたサポートが必要だということも思った。

本について考えること、人を育てるということについて考えること、情報の作り手を支援する方法を考えること、この三つから、情報をはぐくむということについて考えた。その時に思ったことは、情報を消費するだけではなく、作り出せる人間をはぐくむものが、本であり、図書館であってほしいということだった。21世紀は、情報や知識というものへの考え方が、20世紀とは異なったものになる。情報は消費するものではなく、情報は参加して、作るものであり、それによって何かを生み出すものになる。

本にしる図書館にしる、消費型の情報ではなく、生産型の情報になる。ここですべて言っている生産というのは、生きていくという意味である。

その意味で、本書を「税金を使う図書館から税金を作る図書館」とした。実際に税金の作り方が書いてあるというわけではないが、図書館は作ることを支援するところであるという発想に変えたいという思いでつけた。「良書を読んで、よい教養人になる」という人がいるが、その時の良書や教養というのは実際には何なのだろうか。社会と関係を持たない教養があるのだろうか？教養を読んで何やら賢くなるというような情報を消費することに主眼をおくのではなく、何かをするときにサポートしてくれるものに変えたい。教養というものの考え方自体を新しくしたい、社会を理解したり、変えるときに、実際に役に立つ知識をこそ、それは教養と呼ぼう。一方、「本はエンターテインメントであり、教養なんか関係ない」という人もいる。私は、こちらも違うと思っている。世の中にはいろいろ課題があるのに、傍観者であるだけでよいのだろうか。社会を変えていくような情報を作り、提供できるものが、本当の良書だと思うが、これまでの「良書」と「役に立たなくてもよい」という発想から自由になりたいために、役に立つ情報、もう少し踏み込んで税金を生み出す情報と言っているのである。

何も特別な話ではなく、医者でたとえるとわかりやすいだろう。やぶ医者でも何でも、医者であればありがたがられ、医師も病院も、特に何もしなくても患者が来てくれた時代から、きちんと病気を説明でき、好感度もよく、しかも診療が的確である医者でなければ、人は病院に行かなくなった。病院は、サービスにこころを配るようになった。これと同じことが本の世界にも起きているに過ぎないといえるのだろう。たいした内容でもなくても、本を買ってもらえた時代はあった。これからは、楽しくて、た

めになり、感じのよい本しか生き残れなくなったということに過ぎないのだろう。これは本も図書館も同じことである。

普通に役に立つこと、そのことを丁寧にこころがけよう。そんなあたりまえのことにやっとたどり着いたにすぎないのかもしれない。その程度のことには気が付くまでにどれだけの時間と頭をフル回転することが必要であったことが。その記録が本書である。ない頭をぐるぐる回して考えていた軌跡が本書である。今となっては、状況も変化し、考えの変わったものもあるが、書籍を巡る議論の中で、その時々を考えていたことをできるだけそのままとめた。この2年間という特別な時期に、本と図書館を巡って考えた記録である。